

大人数での授業、児童生き生き 中種子町小規模6校交流学习

6月30日に、中種子町交流学习が納官小学校であり、町内の小規模6校の5年生22人と6年生19人が参加しました。

交流会は、児童たちが、大人数での学習や集団活動を通して、他校と交流を深め、中学校進学へ期待感をもたせることを目的に行われています。

児童は、いつもと違う環境に最初は戸惑っている様子でしたが、授業を通して一緒に過ごす中で、次第に緊張もほぐれ、笑顔を見せるようになりました。

授業ではタブレットを使ってグループごとに自己紹介や、アカウントやパスワードの取り扱い、SNSへの書き込みに関する情報モラルなどについて学びました。

また、体育の授業では、ソフトバレーボールや長縄跳びなどを行い、他校の児童たちと協力して大人数での授業を楽しんでいました。



タブレットを使った授業



体育の授業（ソフトバレーボール）

地域おこし協力隊通信 (No. 66)

誰かの思い出になるかもしれない

私の育った岩手県の石鳥谷町という小さな町には、これまた小さな商店街がありました。店舗数は20店舗未満で、長さも300メートルほどでしょう。人があふれるような場所ではありませんでしたが、足繁く通っていた懐かしい場所です。特にお気に入りだったのが、小さな子どもが大好きな駄菓子屋さん。小銭を握りしめて向かっては、どれを買おうかと幼心に迷ったことを思い出します。

実は先日、そんなことを思い出すきっかけがありました。かねてより地域活性化の取り組みを一緒に行っている種子島中央高校の情報処理科の授業にお邪魔させていただいたところ、生徒から『商店街で食べて遊べる駄菓子屋さんをやりたい!』という相談を受けたのです。詳しく話を聞いてみると、かつて旭町商店街にあった中間商店のような、子どもが駄菓子を買に行ける身近な商店を、自分たちの手で提供したいと思いついたそうです。自分たちが体験した幼き日の思い出を紡いでいきたい。そんな素直な動機に、



駄菓子屋の計画を話し合う生徒たち

まっすぐ胸を打たれました。「自分がやりたいこと」というのは、もしかしたら「誰かの思い出になること」かもしれないかもしれません。かつて自分が大切にしていた時間や思い出を、他の誰かのために提供したいというのには、他でもない自分だけができるチャレンジなのだと思えます。

どうやら8月の第1・2・3日曜日の10時から18時までの間に、チャレンジ拠点YOKANAで駄菓子屋を開店する計画のようです。生徒たちが紡ぎたい「思い出」を、ぜひ体感してみたいかがでしようか。

―湯目由華(ゆめゆか)―
中種子町地域おこし協力隊員。
岩手県出身。誰かの「やってみたい!」を一緒に実現する人。地域デザイナー／コーディネーター。